加藤道夫全集 I

加藤道夫全集　第一巻
©1983, Haruko Kato
0393-900124-3978

一九八三年二月二〇日印刷
一九八三年三月　一　日発行

著　者――加藤道夫
発行者――清水康雄
発行所――青土社
東京都千代田区神田神保町一―二九　市瀬ビル　〒101
☎二九一―九八三一〔編集〕二九四―七八二九〔営業〕
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――美成社

加藤道夫全集Ⅰ　目次

I 戯曲

ばあや 8
なよたけ 45
挿話（エピソード） 144
天邪鬼 186
まねし小僧（子供狂言） 203
思い出を売る男 212
祖国喪失 237
襤褸と宝石 306
天国泥棒（現代狂言） 362

II 放送劇

誰も知らない歴史 374
La Bonne Chanson 387
街の子 404
奇妙な幕間狂言 415
永禄狂言 434
泥棒と赤ん坊 452
鼠の浄土 464

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

初詣で 483

Ⅲ 舞踊劇

あらぎぬ 496

Ⅳ 初期作品

夢 516

時計と支那そば 520

蚊取線香のけむ 524

垂論之記 529

「影」 534

銀杏の家 540

或る残酷なる物語（コント） 561

十一月の夜 583

Ⅴ 未定稿

オレステース 622

「西廂記」 626
二条城狂言 629
ヴィレラ京都伝道異聞 634
虫めずる姫君（放送劇） 648
地獄の地図 653
たけとり物語 678
解説（諏訪正） 693

加藤道夫全集 I

監修　中村真一郎
　　芥川比呂志
編集　浅利慶太
　　諏訪　正

I

戲曲

ばあや

一

郊外に近い上品な住宅地――
春の午前。　陽光に溢れた内庭。
盆栽が幾つか並べられている。
庭に面して、南向の暖かそうな居間。
前面にはヴェランダ風の縁側。
籐の洋風家具。　卓子と椅子二つ。
左には障子をしめきった茶の間。更にその左にも奥の部屋が続いているらしい。
中央奥は玄関。
格子の硝子戸を通して門構えの一部が見えている。
その右には洋風の応接間へ通じる扉。

ヴェランダの右手には遅咲きの梅の花が半ば散った枝をつき出している。
ローラー・カナリヤが美しい声で間断なく鳴いている。

人物

父
朝子
花売の老爺
婆や
海軍中尉（山崎晃良）

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

父と娘の会話が何か遠慮勝ちに物静かな調子で語られる。

父　（背後から朝子の差出す上衣を両腕に収めながら）うむ。有難う。……

（間）

朝子　（父の背中をブラシで撫でる手を、不図止めて）ねえ、お父様。

父　ん？

朝子　あたし、婆やを養老院にだけはやり度くないの。あんなに永いこと忠実に働いて呉れたんだし……

父　む、そりゃあお父さんだってやりたくない。……いい婆やだ。あんな婆やはもういくら探したって到底見付かりっこはないだろう。……しかしね、朝子、ああ云う風に身体が弱って了ったら、却って世話をしてやっとく方が気の毒じゃないかな？　ああして、儂の顔をみる度に、相済みませんでございます、相済みませんでございます、と涙ばかり流していたんじゃ、婆やの方だって気苦労だろうし、それに病気だって益々ひどくなる一方だ。……そうかと云って、帰してやろうにも身寄のものがあるわけじゃなしね。……

（間）

朝子　でも、養老院って随分ひどい扱い方をするって云う噂よ、お父様。

父　いや、儂の考えてる所は決してそんなひどい場所じゃない。……静かな、郊外の、まるで療養所の様な、閑静な高原の林の中にある……こいつは、もと矢張り軍医で、儂の知っとる先輩の男が院長をして居ってな。まあ、隠居がてらに老人達を集めて、そう云う様なことをやっとるんじゃが……「まあ、一度連れて来てみなさるがいい、まるで天国の様なところですよ」、などと云うとった。（椅子に坐って、靴下をはき直し始める）

朝子　……

父　しかし、ま、こりゃ別に急ぐ必要もないんだから、……何れ、あれの身体が少し元気にでもなってからの話だな。

朝子　淋しがるわ、婆や、きっと。……

父　いや、そりゃあ、そうなれば、話相手も沢山できることだろうし……

（間）

朝子　ねえ、お父様。

父　ん？

朝子　執拗い様だけど、もう一度お願いするわ。……あたし、どうしても婆やだけは死ぬ迄家に置いといてや

り度いの。

父　（困った奴だという風に、笑って）　しかしね、朝子。それはそう云う風に行かん場合だってあるだろう？まあ、例えばさ、（娘の顔をじっと愛情深く眺めながら）お前がお嫁に行く様なことになったとしてごらん？……え？……（微笑みながら）こりゃ、何時そう云うことになるか分ったもんじゃないからな。

朝子　（澄まして）まあ、ずっと先のことらしいわね。

父　そんなこと云ったって、せんだっての池永の息子さんの話にしたって、まだお前、はっきりした気持を表明したわけじゃなし……そうだろう？

朝子　（下を向いて、わざとらしく子供っぽく羞らう）……

父　そう云うことになったら、お父さん独りじゃ婆やを世話して行くわけには行かないよ。……ああして、しょっちゅう寝てる様じゃ、まるでお父さんの方が婆やにつかわれてる様なもんだ。

朝子　……

父　（からかう様に）え？　朝子。……そうなったら、どうするつもりだ？

朝子　（下を向いたまま、幼児の様に、わざとらしく）　そうね、……連れてく。

父　婆やをか？……（笑う）　一緒にお嫁入りと云うわけだな？（笑う）　……まあ、まあ。お互いに婆やのことは当分心配せんことにしとこう。……（間）儂だって、年はとっているが、これでまだ、何時戦地の病院の方へお召にあずかるか知れない身なんだからね。……そう云うことになったら、お前には田端の叔父さんのとこへでも行って貰おうなどと、お父さんはそんなことまで考えとった。

朝子　（素直に頷く）

父　まあ、婆やは喜んで納得して呉れるさ。……（間）朝子。……お前、ちょっと此処へ坐らんか？　話があるんじゃ……

朝子　何ですの？　お父様。（不審そうな表情で、父に対して椅子に坐る）

父　改まって、なんだが……お前、山崎中尉を知っとるじゃろうが？

朝子　（瞬間、落着きを失って）ええ。

父　突然、お父さんから斯う云うことを云い出すのはいけないことかも知らんが、……実はな、山崎中尉も儂んとこへお前を貰い度いと云う様な意向を云って来とるんだよ。

朝子　（軽い驚きの声を発して、下を向いてしまう）

父　（娘の表情の隅々まで、微笑ましい眼付で追いながら）それが、一昨日のことだったかな？　……あいつは、仲々はっきりしとる……（笑いながら）直談判で儂のところへ来よった。……勿論お前には何も話してないが、儂からお前の気持を聞いて貰い度いと云うんじゃ。

朝子　……

父　なんだそうじゃないか、お前、山崎中尉とは何処かで逢って話をしたこともあるんだそうだな。ん？

朝子　（子供っぽく頷く）

父　（軽く笑い）此頃の若いものには、お父さんは降参した。敵わんよ。え？……

朝子　（あわてて）あら、お父様、あたし、お買物に行った時偶然銀座でお逢いしただけなのよ。……そんな、……

父　（明るい笑を含んだ声で）ま、斯う云う話はお父さんだけで解決のつくことじゃないし、……何れゆっくりお前の気持も聞いて、よく相談してみようと思っとったんだが、……お父さん、どうも忙しくて暇がなかったもんでね。

（懐中時計を出して、見る）

朝子、お前、用事がなかったら、一寸駅までつき合って呉れんか？……そのことでお前の気持も追々聞いてみねばなるまいし、……よかろう？

朝子　（一寸厳粛になり）ええ。

（間）

父　（立上って、庭の盆栽を眺め）今日の日曜日は久し振りに盆栽の手入れでもしようかと思っとったが……

朝子　お父様、一寸、待ってて。（朝子は何かしら妙に浮き浮きした気持になり、つと奥に入ると、間もなく割烹着を脱いで再び現れる）どうも、お待遠様。

（二人、玄関の方へ行く）

父　（左手の奥の方を窺って）婆やは寝んどるかな？

朝子　ええ、何だか未だ少し工合が悪いらしいわ。（父に外套を着せてやりながら）今日も病院なんでしょ。お父様？

父　むや、今日は軍医学校の会でな。……三時頃には帰れると思うが。

朝子　（先に外へ出て、空を見上げ）まあ、今日は暖かでいいわ。（二人、左の方へ去る）

舞台は暫く閑散。

ローラー・カナリヤの声だけが、思い出した様に沈黙を

破る。

暫くすると、遠くの方から花鋏のかちかち鳴らす音が聞えて来る。それが、段々近くなる。やがて、裏木戸を開ける音。

『御前様、大変結構な御陽気になりましてございます。』と云う声。鋏の音続く。

花売の老爺が手押車に春の草花を一杯載せて、静かに右手から現れる。

七十はとっくに過ぎているが、灰色の長髪をたくわえた矍鑠たる老人。腰も曲っていないが、歯が無いらしく、話をする度に口をもぐもぐさせる。御得意の家なので、勝手知った態度で気兼ねもなく、何時もの様に気安げに振舞う。

老爺　えー、御気嫌さんでございます。

返事がない。

老爺　（家人がいる積りで）今日は、桃の花にサフラン、室咲きのチューリップ、シクラメンにフリージヤなぞ如何でございましょうかな。仲々と香りがよろしゅうございますでな。

カナリヤと鋏の音が止まると、あたりは不気味な程森閑としている。

老爺　（不審そうに縁先の方へ歩み寄り）　えー、御気嫌さんでございます。（間）お留守でございますかな？

静寂。

老爺　（少々不安気に、今度は障子の蔭に向って）婆やさんはお寝みかな？

静寂……

そこはかとなく春の囁き声がする様だ。

老爺は立止って、不図、首を傾げて考えこむ。

再びカナリヤの思い出した様な鳴き声。

瞬間、老爺は我に返って、また花鋏をかちかち云わせながら手押車の方へ静かに戻って来る。

老爺　（独り言）……今日は御前様も嬢さまも御出掛けでございまする……婆やめも加減が悪くておねんねらしゅうございますな……どら、それではまた。

（再び、手押車を押して、帰って行こうとする）

婆や　（障子の蔭から）爺やかい？

老爺　ほい。……婆やさんお目覚めかな？

婆や　（身体を起こす気配）ああ、……先刻っから知っとった。

老爺　（再び縁先に歩きながら）それは、それは、お人が悪い……（障子に向って）如何かな、婆やさん、その後、工合は宜しい様かな？

暫く返事がない。

婆や　（やがて障子をあけて出て来る。寝衣に前掛をつけ、羽織をはおった感じ。だるそうな口振りで）ええええ、……年をとると、から意気地がなくなってねえ。……まあま、お蔭様で大分工合もようなったらしい。（空を仰ぎ）ほう、今日はまたええ陽気で……（縁側に腰む）なにかえ花あるかな？（花車の方へ行った老爺に）爺や、あじさいは未だだったね。

老爺　寝呆けたことを云わっしゃるな、婆やさん。……あじさいは水無月、文月。梅雨入り時に咲き初めるものと相場が決まってござる。……（半ば独り言）あじさいの花の四片に、逢い見てしがな……となな。（車から草花を撰り採っている）

婆や　（淋しげに微笑み）頭も悪うなった……

長い沈黙。花を中心にして……

老爺　御前様は何処ぞお出ましかな？

婆や　（無言で頷き）……此頃はお休みの日までお忙しゅうて、おくつろぎの暇さえない御様子でな。……そこへ婆やめがこんな意気地のない身体になって了うて……もう、相済まのうて、相済まのうて。

老爺　（花を適宜に切りながら）婆やさんも、……早く快くなって、……御前様や嬢様に、存分の御恩返しをせぬことにゃ、……先ず先ずお天道様に顔向が出来兼ねると云う……まあ、一日も早く達者な身体におなりなさるがいい。

沈黙

婆や　なあ、爺や。

老爺　（相変らず草花を切りながら）ほい。

婆や　うすうす耳にしたんやが、……御前様、婆やめを養老院に送るとか、送らんとか……

老爺　（はっとした表情で婆やの顔をみる。間。やがてまた思い出した様に花鋏で花を切り始める）……それも、婆やめを思って下さる御前様の御親切と思えば……

沈黙。時々鋏で草花を切る音。

婆や　私は御前様のお云い付けなら、どんなこっても喜んで聞きますわな。……唯、なあ、……何時も何時も愚痴の様だが、……死ぬ前に一遍だけでも、故郷に帰って、昔のお邸の様子が知って見とうて……

老爺　（稍ゝ烈しく）止めさっしゃい！（寂然……だが間もなく老爺は何でもなかった様に、低く節をつけて唄い始める。彼の手には一束の花束が出来上って行く）わたしゃ、備前の、岡山育ち……米のなる木をまだしらぬ……

婆や　（懐しさに心を震わせて、故郷を回想する。つぶやく

様に）それをよう唄うてなあ。

（間）

老爺　お蔭で、爺やめはすっかり婆やのお故郷の唄まで覚えて了いましたわ……（花束の工合を直しながら縁先の方へ歩いて行く。婆やは気持を和らげられて、微笑んでいる）

婆やさん。花瓶をとって頂きましょうかな。

婆や　（花束を見て）ほう、ええ。（大儀そうに奥へ入り、花瓶を抱えて出て来る）うまいこと、生けてな。……

面窶れした婆やの弱々しい顔は、此の頑丈な老爺の仕草を信頼しきった様子で眺めている。またしてもカナリヤがひとしきり。

老爺　（花を生けながら）嬢様も何処ぞ、お出ましかな？

婆や　（初めて気付いた様に）さあね。……御前様のお見送りがてら、お買物にでもいらっしゃったかな。

老爺　嬢様はこのフリージヤがとてもお好きでござんしたな。……嬢様がいらっしゃると、爺やめの生花は散散な御叱言を頂戴致すのでな……どうもこうも、花屋の面目丸潰れとござる。

婆や　（微笑みながら）

老爺　御立派な嬢さまでいらっしゃる。

婆や　この婆やめも、近頃はお嬢様には御厄介ばかりお掛け申して……

老爺　婆やさんもしあわせだ。あんな御立派な嬢様に可愛がって頂いて。……昔の事なぞ思い出しては罰があたりますぞ。

婆や　さよう、さよう。

老爺　（花を生け終って手をはたく）本当に、考えてみれば勿体ないしあわせだ。婆やめも、この花屋の爺やめも、決して独りぼっちじゃござんせん。

婆や　（殆んど感極まった声で、花を凝視めながら）さよう、さよう……

（間）

老爺　（湿っぽくなった二人の間の空気を振り払う様に）ではな、婆やさん。御前様がお帰りになったら、花屋の爺が来て、此の花を生けて行ったと、そう申し上げて下さる様にな。御代金はまたこの次にでも頂戴致しましょうからして。

老爺、花車の所へ戻る。婆やは縁側に立ったまま。

婆や　爺や、あじさいが咲いたら、真先に持って来て呉れんと、待遠しゅうて。……わたしゃどう云うものかあの花が一番好きでな。……故郷にはよう咲いとった。

老爺　（帰り支度をしながら）はい、はい。……あじさい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com